

受戒会（じゅかいえ）のお誘い

妙心寺派管長・山川宗玄老師が戒師（かいし＝戒律を授ける師僧）をされる授戒会（じゅかいえ）が開かれます。どなたでも参加できます。ごいっしょしませんか。といわれても、何のことだかわからないでしょう。くわしくは、別紙に申込み書を同封しました。檀家さんがご一緒ならば、檀家さん以外の方も参加できます。

日 時 5月13日（火曜日） 9時～16時

場 所 圓光寺（小川町青山345）

参加費 12,000円



境内の北、旧中山道に面したところにある、伝道掲示板の令和6年正月に掲載することばを紹介します。



伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。経典の引用であったり、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示板ではお伝えできない、ことばの周辺は松岩寺ホームページのblogに載せています。

へー、と自分自身で驚いている。冒頭にかかげた詩句は有名だけど、まだご紹介していなかったか（有名だから紹介しなかったのかも）。

詩の背景と現代語訳は、大岡信著『第四折々のうた』（岩波新書）から引用します。「折々のうた」は昭和54（1979）年から平成19（2007）年まで、朝日新聞朝刊第一面に大岡信（1931～2017）が連載したコラムです。全文を紹介します。

〈『和漢朗詠集』巻上「仏名」。『菅家文草』中の仏教法会を詠じた長詩「緋梅会作、三百八言」からの一節。言い廻しが漢詩独特だが、大意はおよそ次のようになるだろう。「香は火を用いてたくものである前に、何よりもまず禅定の心のうちに薫るのだ。花も春の到来によってはじめて開くのではない。何よりもまず合掌した手に花は咲くのだ」と。意味もさることながら、表現法そのものに妙味がある。〉

新聞掲載時は一行が20字で9行。全部で180字に収めるという名人芸です。もう、ちょっとかみ砕いた現代語訳を引きます。川口久雄訳註『和漢朗詠集』（講談社学術文庫）から。

〈禅定の心がしっかりしてさえいれば、別に火をもってきて香を焚かなければならないということはありません。しっかり合掌することができてさえいれば、それが仏にまつる花なのであって別に春をまつことはありません。〉

くだいてくだいてわかりやすくドロドロになった現代語訳です。ただ、大岡訳も講談社学術文庫訳も「禅心」を「禅定」と訳しているのですね。禅定のほうが、かえって難しくなるのではないかなあ。「定」の字を白川静『常用字解』（平凡社）は「安定」と教えてくれます。「禅」の字をみて、現代人は「禅宗」の「禅」、あるいは「坐禅」の「禅」を連想してくれるけれど、もともとは「ゆずる」という意味なんだそう。「禅譲」と言うじゃないですか。けんかしないで、譲りあうような安定した状態ならば、香を火で焚かなくても、香（かぐわ）しい花のような人間になれる、と天神様はおっしゃっている。でもねー、そんな人を見たことある？ 会ったことある？ いないよね。実現不可能なことをなぜ、詩にするのか。

こう思うのです。香しくて花のような人物というのは、北極星のような存在なのではないか。星は手に取ることはできない。でも、いつも同じ場所でかがやいているから、行くべき場所をしめしてくれる。願いは大きいほどよい。

三月のことば
香は禅心よりして火を用ゐることなし
花は合掌に開けて春に因らず
菅原道真

ふるあーる

お彼岸法要と弦楽四重奏

ミュヒテン・カルテット（Möchten Quartett）2023年結成。

Möchten（読み：ミュヒテン）とはドイツ語で“～したい”の意味。

「カルテットやりたいよね！」という気持ちだけで結成された食いしん坊4人組（大食いはうち2人）。行きつけのお店は「PICCOLO ITALY tucca」

2023年12月、2024年12月に旧国立駅舎にて「国立チャリティー・ランドセル・コンサート」を、2024年10月、羽村の「プリモホールゆとろぎ」にて「ランドセル・チャリティコンサート」を行う。2024年に1st、2ndコンサート、2025年3月に3rdコンサート予定。

ふるあーる (予定)

・モーツァルト / アイネクライネナハトムジーク

・ベートーヴェン / 弦楽四重奏第7番 ラズモフスキー第一番より1楽章

・日本の曲など



旧国立駅舎再築工事 写真提供 井桁スレート（株）

ミュヒテン・カルテットがコンサートをしている旧国立（くにたち）駅舎は、百年前の大正15年に建てられた木造建築です。JR中央線国立駅として使われてきましたが、平成18年にとりこわされます。しかし、市民の援助によって令和になって再築されます。その工事でシンボルともいえる赤い屋根を担当したのが、松岩寺の檀家である井桁スレートさんです。奇縁ですね！